# 一側性難聴者の商業施設における環境改善に関する研究

長岡造形大学 造形学部 建築・環境デザイン学科
192034 中村彩乃

## 概要

卒業研究に取り組むにあたり、自分自身のことを何か昇華できる内容にしようと考えた。著者は先天性感音性一側性難聴の当事者であり、生まれつき片耳が機能していない。一側性難聴者は日常生活において、健聴者より明らかにハンディキャップがあるが、その障壁の理解されにくさに違和感を感じており、日常生活における環境改善の第一歩として本研究を実施する。本研究ではまず一側性難聴者が商業施設において感じている障壁やその対処における認識についてアンケート調査を実施し、回答を得た。障壁に対する意識の違いに着目し、因子分析から得られた因子得点を用いてクラスター分析をおこない、7 群に類型化した。次に健聴者と一側性難聴者の意識を比較し、一側性難聴特有の障壁および、一側性難聴者と健聴者に共通する障壁を明らかにした。また、一側性難聴の受障年齢（先天性・後天性）および性差による商業施設での障壁に対する意識を比較した。さらに、実態を把握するために一側性難聴者に対するヒアリング調査をおこなった。

分析結果から、一側性難聴者は店員や同行者とのコミュニケーションが求められる施設において障壁を感じる傾向があり、特にレストランにおいて障壁を感じていた。人や車の接近などの気配に気づきにくいことも明らかとなった。コミュニケーションは人が行動を起こすことで解決できることであるのに対し、気配に気づきやすい空間づくりは、空間デザインによって解決することができる。この研究結果は、一側性難聴者を含め誰もが快適に楽しむことのできる空間の創出に寄与することが期待される。

## 研究の目的

一側性難聴とは、片方の耳は正常でもう片方の耳が聞こえにくい、あるいは全く聞こえないという聴覚障害のことである。先天性の一側性難聴は 1000 人に 0.9～1.7 人の割合で発症し、後天性も合わせて日本には約 30 万人の一側性難聴者がいると推測される。一側性難聴者は患耳側での聴取・騒音下での聴取・音源定位を不得意とし、その多くはコミュニケーション時に発生するものであるが、「見えない障害」として軽視されてきた。本研究では、「見えない障害」を抱える全ての人が自分の障害を実感する機会を減らし、快適に空間を楽しむことの出来る環境改善の方策を探ることを目的とする。

## 研究の方法

日本在住の一側性難聴者を対象に、web アンケート調査とヒアリング調査から商業施設において感じている障壁を模索する。アンケート調査対象者は、一側性難聴者と健聴者である。一側性難聴者の調査には、日本で初めての一側性難聴当事者組織である「きこいろ」の協力を得た。分析方法としては、商業施設における一側性難聴者の意識の特性を明らかにするため、因子分析をおこなった。因子分析から得られた因子得点によってクラスター分析をおこなった。群間の比較ではマンホイットニーの U 検定およびクラスカルウォリス検定と Bonferroni による多重比較をおこない、有意確立を求めた。分析は IBM SPSS Statistics 28 を用いた。また、参与観察から得られた知見を合わせて分析する。

## アンケートの結果および考察

第 4 章 4.1-4.2

### 【一側性難聴者と健聴者の比較項目】

#### ・基本属性（一側性難聴者 n=135）

| | |
|---|---|
| 年齢 | 10代：10人　20代：31人　30代：26人<br>40代：34人　50代：30人　60代：3人<br>70代以上：1人 |
| 性別 | 男性：30人　女性：103人　無回答：2人 |
| 職業 | 会社員：49人　公務員：14人<br>自営業・個人事業：14人<br>専業主婦・主夫：17人　学生：20人<br>パート・アルバイト：18人　無職：2人<br>その他：1人 |
| 難聴度合い<br>難聴耳側 | 左耳が聞こえない：51人<br>左耳が聞こえにくい：10人<br>右耳が聞こえない：54人<br>右耳が聞こえにくい：17人<br>両方聞こえにくい：2人 |
| 受障年齢 | 2歳以下：37人　3-5歳：25人<br>6-9歳：18人　10代：10人　20代：12人<br>30代：16人　40代：12人　50代：3人<br>60代：1人　70代以上：1人 |
| 補聴器有無 | クロス補聴器：6人<br>人工内耳：1人<br>補聴器(その他)：8人<br>使用していない：120人 |

※受障年齢に関しては、先天性難聴の中でも難聴の発覚時期によって差があるのではと感じ、10歳未満は特に分けて項目を設定している。一般的な一側性難聴の受障年齢の推移と近似しており、標準的なデータが取れている。

#### ・基本属性（健聴者 n=85）

| | |
|---|---|
| 年齢 | 10代：23人　20代：42人　30代：2人<br>40代：7人　50代：8人　60代：3人 |
| 性別 | 男性：22人　女性：60人　無回答：3人 |
| 難聴度合い | 両耳健聴：85人　難聴あり：0人 |

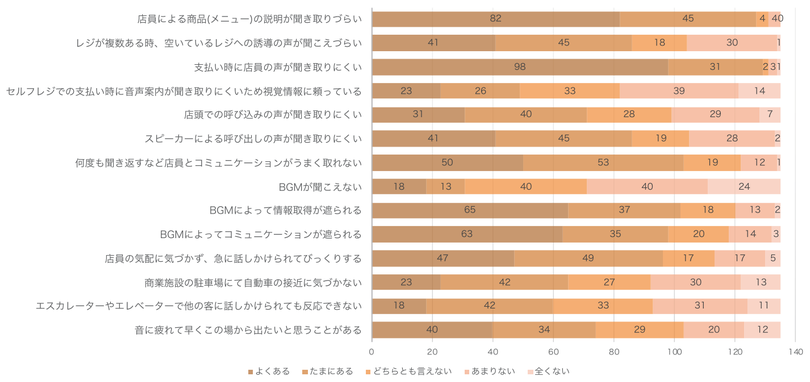
※長岡造形大学の学生・教職員に対して実施したため年齢に偏りがある。また、学生が多いため職業は省略。

#### ・商業施設における具体的な障壁（一側性難聴者 n=135）

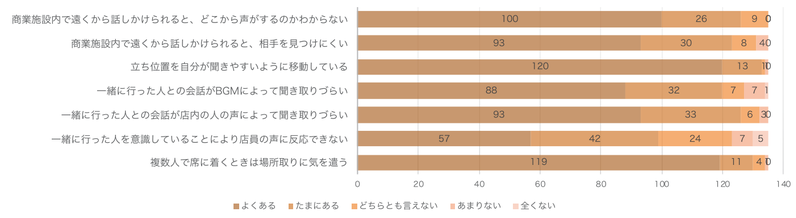
1 人のときの障壁として「BGM が聞こえない」の項目に関しては、想定される店舗によって BGM の必要度が異なると考えた。例えば、アパレルショップでは服を選んだり探す行為に集中しているため店内の BGM は環境音として認識するが、レストランでは料理が運ばれてくるまでの待ち時間で同行者との会話の話題が店内に流れている BGM になることが想定できる。全体としては、BGM にあまり重きを置いていないと考えられた。

＜自由記述＞
【1 人】店員に話しかけられるのが嫌で店内に入るのを躊躇してしまう
【1 人】コロナ禍のマスク着用により店員の声が聞こえづらく、口元が見えないので全く会話がわからないこともある
【複数】ポジショニングに常に気を遣い、移動の際に一瞬視界から消えるので探される
【複数】場の空気を壊しそうで聞き返せず愛想笑いをする

**＜1 人のとき＞**




**＜複数人のとき＞**

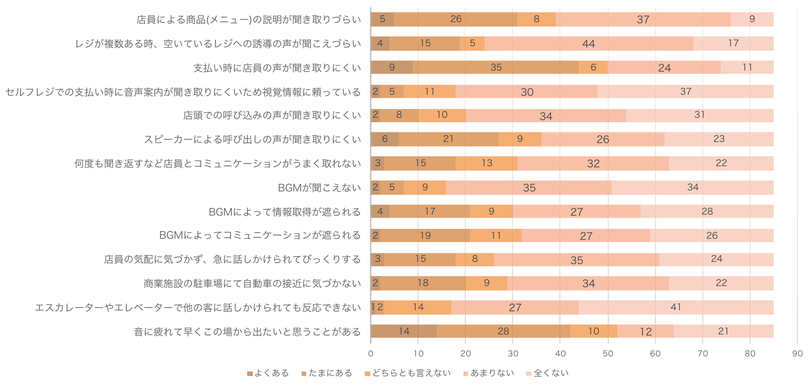



#### ・商業施設における具体的な障壁（健聴者 n=85）

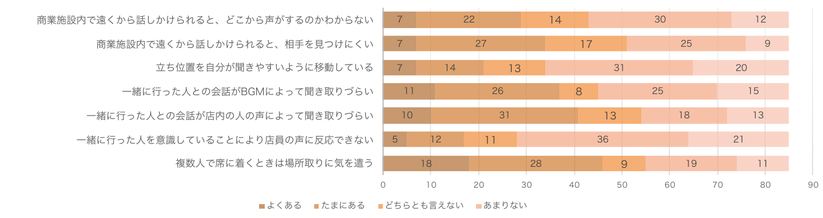
複数人で商業施設に行く場合の方が若干「よくある」「たまにある」と回答した人の数が増えたが、特に大きな変化はない。複数人のとき、特に「よくある」「たまにある」の回答率が高かった選択肢である「複数人で席につくときは場所取りに気を遣う」に関しては、音に関わる障壁ではなく、その多くは利き手の配慮や上座・下座のルールなどに則っておこなっていることが後の健聴者へのヒアリング調査で判明した。
一側性難聴者の同項目による結果と比較すると、全体的に障壁度合いの差が歴然としている。

＜自由記述＞
【1 人】1 人でいると音に過敏になる
【1 人】コロナ禍でマスクを着用していることで、聞き取りづらい場面がある
【複数】2 人以上だと聞き取りづらく、複数人での会話がしづらい

**＜1 人のとき＞**




**＜複数人のとき＞**

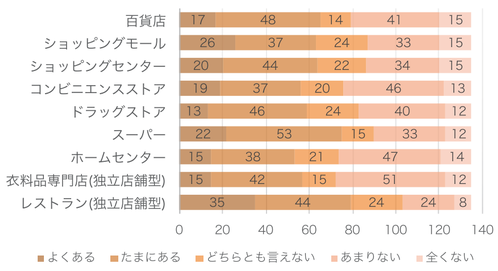



### 【一側性難聴者のみの項目】

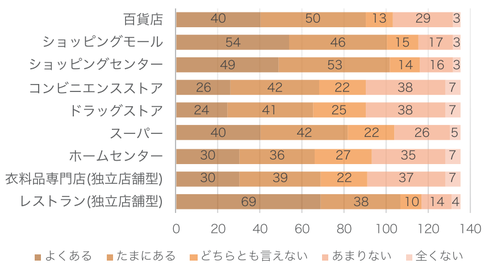
#### ・商業施設において障壁を感じる頻度

複数人でいる時の方が比較的障壁を感じていることがわかる。その中でも、圧倒的にレストランにいるときに障壁を感じている。長時間、座る位置を固定され、自分が聞きやすいように工夫ができないのだと考えられる。

**＜1 人のとき＞**




**＜複数人のとき＞**

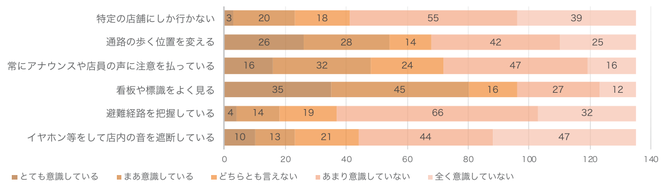


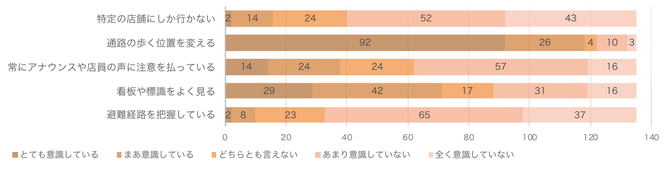

#### ・障壁の対処に関する意識

複数人になると、圧倒的にポジショニングへの意識が高まることがわかった。音を聞こうと意識する人も、音を聞かないように意識を向ける人もいた。

＜自由記述＞
【1 人】店員の顔をよく見て話したり周りをよく見て確かめる
【1 人】会話を極力減らしたいので細かい注文が必要な店舗など店員とのコミュニケーションが多くなる場所には行かない
【複数】常にポジショニングには気を遣う
【複数】会話に参加せずに聞き流す

**＜1 人のとき＞**




**＜複数人のとき＞**